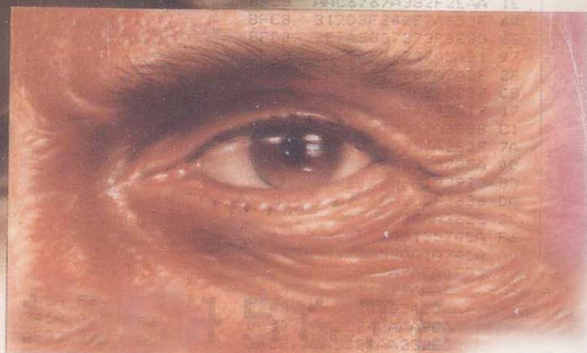


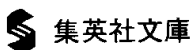
By NOBUHIKO OCHIAI

ザ・スパイゲーム

落合信彦



集英社文庫



ザ・スパイ・ゲーム

1985年3月25日 第1刷

1992年5月15日 第23刷

定価はカバーに表示してあります。

著者 おち あい のぶ ひこ
落 合 信 彦

発行者 若 菜 正

発行所 株式 集 英 社
会社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50

(3230) 6100 (編集)

電話 東京 (3230) 6393 (販売)

(3230) 6080 (制作)

印刷 中央精版印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© N. Ochiai 1985

Printed in Japan

ISBN4-08-750866-8 C0195

集英社文庫

ザ・スパイ・ゲーム

落合信彦



集英社版

この作品は一九八三年三月、集英社より刊行された『シリコン・バレー逆おとり作戦』を改題したものです。

目次

第一部 シリコン・バレー逆おとり作戦	五
--------------------	---

第一章 オペレーション・サンライズ	六
——日の出作戦——	

第二章 ザ・セット・アップ	三
——仕掛け——	

第三章 ザ・コンタクト	五
——接触——	

第四章 ザ・トラップ	八
——ワナ——	

第五章 ザ・ラスト・アメリカン・ドリーム	一三
——アメリカ最後の夢——	

第六章 ザ・ショーダウン	一六
——対決——	

第七章 ゲット・アウェイ	一八
——逃げきり——	

第二部 さらに愛するロシアよ	二〇
——ある元暗殺者の告白——	七

本文写真／岡野 豊

大野 広

CHARLES O'RER
(Imperial press)
DUTTON
W
W
P

第一部

シリコン・バレー逆おとり作戦

第一章

オペレーション・サンライズ

日の出作戦

「デーナ、まさかあんた恐くなったんじゃないだろうな」
彼は鼻でせせら笑った。「恐怖心などオレはとうの昔
にベトナムの空でなくしてしまった。友人としてあんた
の身を心配してるだけさ」

あとひと押しだ。「東京から電話した時、オレは今度
の取材がおもしろ味とスリルでは百パーセントとあんた
に保証した。オレがウソをついたかい」

彼の顔が初めてほころんだ。小さく首をふりながら彼
が言った。「あんたは馬鹿だよ。しかし、愛すべき馬鹿だ」

一九八二年十月二十四日、日曜日。

ロス・アンジェル空港を発つてからすでに四十分が過ぎていた。隣りにすわったジェリーと名乗るアメリカ人ビジネスマンは相変らずたわいもないことをしゃべり続けている。こっちが聞いていようがいまいが関係ないといった様子だ。私は適当に受け流しながらこれから取材についてあれこれと考えをめぐらしていた。

DC 8 型機はそれまで同様スムーズな飛行を続けた。サンタ・クルズ山脈を越えたところ

で機体がちょっと右に傾き、ゆっくりと降下し始めた。眼下にサンノゼの真白な町並が夕日に反射して鮮かに浮び上っている。その北にフリーウェイ〇一号線と二八〇号線にはさまれるようにしてサンタ・クララ、サニーヴェール、パロ・アルトと続く。俗にいう「シリコン・バレー」の中心を形成する町々である。過去に何度もこれらの町の上空を通過してきたが、今回は妙に新鮮に私の目にせまってくる。

機はさらに下降しながら北上を続け、定刻通り六時二十三分サン・フランシスコ国際空港に到着した。

ゲートを出たところでデーナが待っていた。タートルネックと空軍パイロット用ジャンパー、そしてジーパンといういでたちだ。なにを着てもダンディに見える男である。

デーナ・ドレンコスキー、三十五歳。前作「傭兵部隊」を読まれた方なら彼については覚えていることと思う。名門ハーバード大学からの奨学金を蹴ってコロラド・スプリングスの空軍士官学校に入り、卒業後F4戦闘機のパイロットとしてベトナム戦争に参加。しかし、勝てる戦いをみすみす負け戦さに導いているとしか思えなかったアメリカ政府の姿勢に深い絶望感を抱き、そのエリート・コースを捨て傭兵となり世界各地の戦場を戦い抜いてきた、文字通り地獄から生還した男だ。

空港ビルを出るとすでに外は夕闇に包まれ始めていた。われわれはデーナのポルシェに

乗り込み空港とは目と鼻の先にあるエア・ポート・ヒルトンへと向った。

今回デーナは取材対象としてではなく、私のアシスタントとして働いてくれることになっていた。普通の取材活動ならジャーナリズムを少しでもかじったことのある者でも十分であるが、今回は今までのケースとは全く性格が違う。三つの絶対的条件が満たされていなければならなかった。

まず第一に完全に信頼がおける人物であること。これには客観的保証などないから、多分に私自身の直感と本能で定めるほかはない。第二は人一倍度胸があること。一見腹がすわっているようだが、いざという状況で唇がふるえたり、パンツを濡らすような人種が多いのが今の世の中である。この点デーナは何度も死地をくぐり抜けてきただけあって安心出来る。第三の条件は法律の知識に詳しく、出来れば弁護士資格を持っていること。七カ月前デーナを取材した時、彼は傭兵の仕事から一時足を洗い、弁護士の資格を得るため法律学校で学んでいた。その後弁護士試験に通り、現在はシリコン・バレーにある法律事務所で働いている。

弁護士の友人ならくさるほどいる。しかし、他の二つの条件に合致する者となるとなかなかむずかしい。同様に第一、第二の条件を備えた友人は多いが、法律の知識に精通した者となるとこれまたクエッション・マークである。三つの条件を完璧にそなえた人物は、

私の知り得る限りデーナしかいなかった。

最初この仕事について東京から電話を入れた時、私は当然ノーの答えを予期していた。かけ出しの身であるし、事務所の他の弁護士達がいやがる仕事を押しつけられ人一倍忙しい彼のことである。しかも取材の内容は電話で話せるような事柄ではない。私は内容にはいっさいふれずただ彼の助力が欲しいことだけを強調した。彼の答えは意外だった。二、三週間なら大丈夫かもしれないという。しかし、条件がひとつだけあった……弁護士の仕事を休んでも私のアシスタントとして働くだけのおもしろ味とスリルがその取材にあること。その点は百パーセント自信を持って保証するが、すべては直接会った時話すということで一応の協力態勢はとりつけることが出来た。

チェック・インをすませ、ホテル内のレストランで夕食をとった後、われわれは私の部屋にとじ籠ってミーティングを開始した。私が話しデーナが専ら聞き役にまわった。最初に私は今回の取材のテーマと目的を出来るだけ詳細に説明した。

まず取材のターゲットはシリコン・バレー、テーマは二つ。ひとつはそこで働き働く人間たちに接して彼らのナマの声を聞くこと。IBM事件が起きて以来シリコン・バレーに關してはいろいろなレポートや記事が書かれた。しかし、それらは一様にシリコン・バレーを表面的にとらえるのみで言ってみれば単に外観をなでたに過ぎなかった。人間を全く

とらえていないのである。シリコン・バレイのような好テーマにとり組みながら、最も重要な要素であるそこで息づく人間を語らねばなんの意味もない。私は常々ジャーナリストにとって最高のテーマは人間を描くことだと思っている。特にシリコン・バレイのような舞台ならなおさらのことである。アメリカの（ということは世界の）エレクトロニクス産業の中心地であるこの地では一夜にして二十歳代の億万長者が生まれ二年で上場するような企業が続出する。当然一攫千金をねらう東部からの投資家も殺到し、沈滞ムードが漂う今日のアメリカでは唯一と言っても良い程ダイナミックさに満ちあふれている。生活のテンポも他の地域に比べてはるかに早く、ライフ・スタイルも大きく違う。二十代から三十代の社長や会長が圧倒的な多数を占めるここでは四十五歳はすでに老人と見なされる。家用飛行機の数やフェリリ、マゼラティなどの高級車の数は、他の地域に比べてはるかに多いが、同時に離婚率（バレイの中心を成すサンタ・クララ郡では毎年結婚するカップルより離婚するカップルの方が多い）、アル中患者、ホモ人口などでも他を圧している。また成功者の中には「金だけが人生の通信簿」とうそぶきながら財を成し続ける者もいれば、あまりに過酷な競争に耐えられず会社ぐるみで精神分析医に通っているというようなケースもある。まさにアメリカの栄光と悲劇を端的に物語っているようだ。今では日本と少からぬかわり合いを持ったシリコン・バレイの内面を知るには、彼らに直接会って話を聞

くのが一番である。

しかし、これをするのにはなにもデーナの協力はいらない。私が独自で十分に出来ることだし、しかもジャーナリストとして堂々と取材出来る。ごく簡単なことだ。

ここまではデーナは何も言わずただ時々うなずきながら聞いていた。私は第二のテーマの説明に移った。

以前から私はシリコン・バレーにおいて熾烈な情報戦が行われているということも多く、ソースから聞いていた。あるペンタゴンの関係者は今日のシリコン・バレーとサン・フランシスコ地区でのスパイ合戦は、かつてのテヘランやベルリンの比ではないとさえ断言した。私もずっと以前石油ビジネスをやっていた頃何度もテヘランに滞在したことがあるが、当時のテヘランでの各国スパイの動きは私のような第三者の目から見てもすさまじいの一語につきた。ホテルのロビーやカフェはCIA、モサド、KGBなどのエージェントでごったがえしていた。まるでスパイのバザールだった。もちろん当時のサバック（イラン秘密警察）が彼らを比較的自由に泳がせていたこともスパイ・ラッシュを助長させていた一因である。

今日のシリコン・バレー周辺は当時のテヘラン以上というのだからそのひどさはわれわれの想像をはるかに越えるものに違いない。しかもアメリカ政府はサバックのようにこれ

らスパイを見て見ぬふりなどしていない。全力を尽してたたきつぶそうとしているのだ。一九八一年一月にレーガンはこれらスパイに対する措置として「オペレーション・エクソダス」(エクソダスとは出国の意味)なる作戦の開始を指令した。アメリカの高度技術が外国に流れるのを防ぐためにとられた水際作戦である。その結果半年たらずで五百七十三件、総額四千五百万ドルに匹敵する技術情報が外国へ持ち出される寸前にキャッチされた(しかし、これはキャッチされた分で、作戦の網を逃れたスパイたちによって持ち出された分はこの数倍にのぼるといわれている)。

エクソダス作戦が開始されて以来、私は出来る限りの情報を集めてこの作戦の推移を見守り続けてきた。タイミングとキッカケさえあればいつかは取り組んでみたいと思ったテーマだからだ。

そのキッカケは意外と早く訪れてきた。いうまでもない。一九八二年六月に起きたIBM産業スパイ事件である。

暗号名「PENGE M」―灰色電子市場潜入作戦―(ペネトレーティング・ザ・グレイ・エレクトロニック・

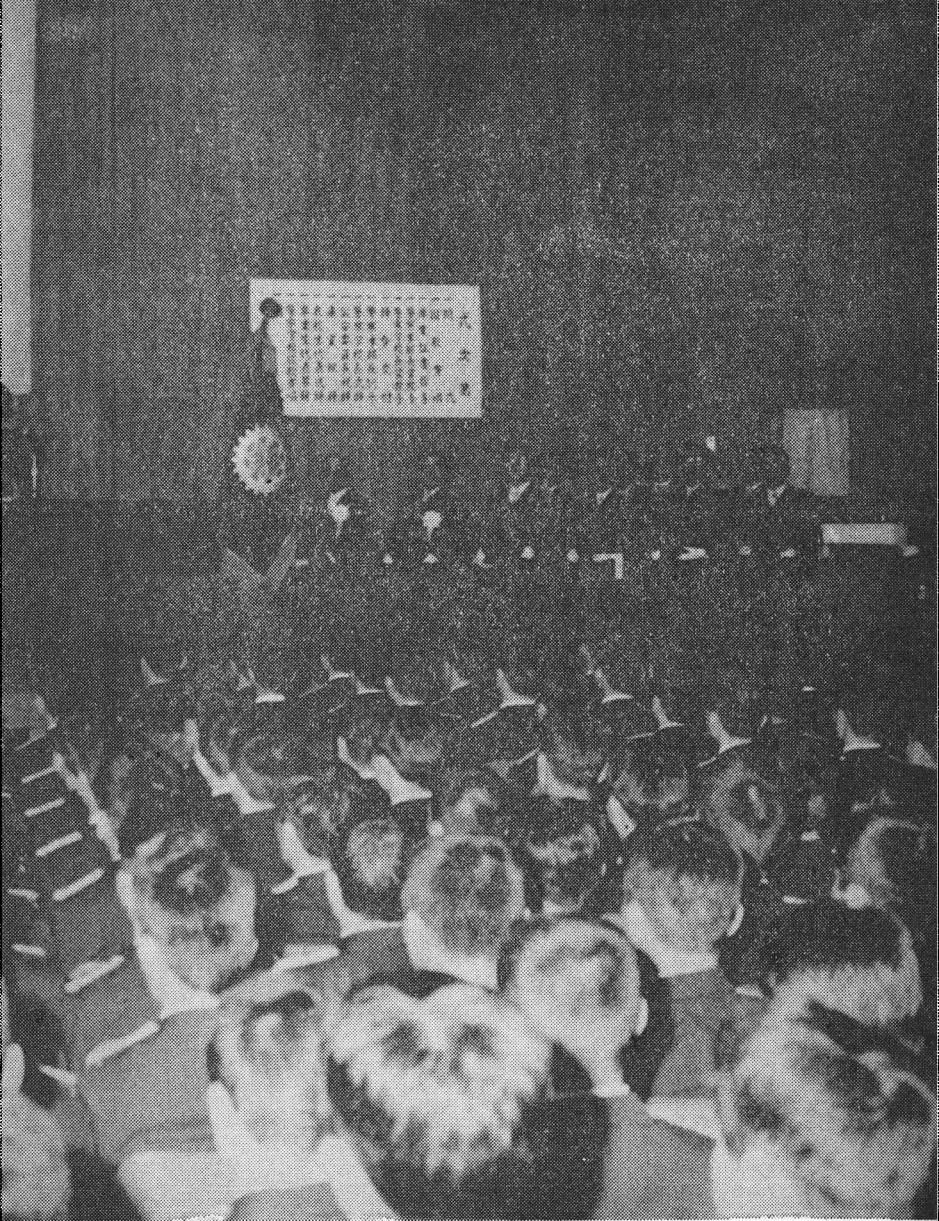
マーケット)と銘打ったこの対日立、対三菱作戦はもともとエクソダス作戦の一環だった。FBIがステイン^イグ・オペレー^オション^トまで使ったこの事件を目のあたりにして一般の日本人は初めてシリコン・バレーの情報戦のすさまじさを見せつけられた。事件後ワシントン

で会った司法省の一員が語った言葉が印象的であった。「あの程度のこと（IBM事件）は単なる氷山の一角にすぎない。シリコン・バレーとその周辺では守る側（アメリカ）と盗む側（ソ連、中国、日本などの外国）との闘いはより熾烈により複雑なスケールで日夜繰り広げられている」

では一体実際のところはどうか。これを知るには直接シリコン・バレーに行つてそこで展開されているスパイ戦をこの目で見、ハダで感じるのが最高の方法である。とは言つてもただ乗り込んでいって、FBIにスパイ戦の実態取材の協力を仰いでもせいぜいおざなりのインタビューで終つてしまうのがオチだ。

唯一最良の方法はただひとつ……私自身が実際のスパイ戦のド真中に身を置くことである。しかし、これは容易なことではない。第一ジャーナリストとして動き回することは不可能だ。超極秘性が要求されるスパイ活動に関係している者が最もきらうのはジャーナリストである。ジャーナリストとのコンタクトは彼らにはタブー中のタブーなのだ。こっちがジャーナリストと判ればまず誰も相手にもしないだろうし、ヘタをすると消されることにもなりかねない。

だからジャーナリストとして入って行くことは不可能だ。となるとそれに代るなんらかのカバーが絶対必要となってくる。しかもそのカバーは私にピッタリと一致しなければな



大阪府警察学校の卒業式は、一糸乱れぬ厳肅な規律のもとに行なわれたが、目に見えぬところで腐敗がはじまっていた。

